連載講座 第56回

未来と共に過去の評価も

作家　童　門　冬　二

1948年（昭和23年）は、忘れられない年だ。私の生き方の基礎はこの年にコンクリートされた気がする。

まずいくつかの外国人の発言に出会った。この年の誕生日に私は20歳になった。しかし社会的混乱と食糧不足で“成人式”なんぞ誰も発想しない。神田に行って書店の店頭で、「世界からの励まし」みたいな本をみつけた。中にルーマニアの作家コンスタンチン・ゲオルギュのメッセージが目にとまった。というより“心”にとまった。以後、いまだにとまっている。つぎのような発言だ。

「たとえ世界の終末が明日であろうとも、私は今日（も）リンゴの木を植える」

その時の世界情勢にピッタリのメッセージだ。乗る飛行機がなくて、不完全燃焼の気持を抱いたまま“娑婆（世間）”に戻ってきた海軍の予科練出の私は、生き方に途惑っていたが、このメッセージを読んで思わず、（道標はこれだ！）と心にきざみつけた。

もう一つの衝撃はジョージ・オーウェルが四八年をひっくりかえして書いた、一九八四年」という空想物である。

「八四年には人間生活にこういう科学製品が参加している」として、百くらいの機器を空想していた。テープレコーダー・テレビ（多重放送）・AI・ロケット・コンピュータ等々。

ある研究者が八四年に、

「オーウェルの空想はどのくらい実現したか」を調べて発表した。八十余あった。

私は恐怖と同時に、

「人間が空想する物は必ず実現する」

という鉄則めいたものを感じた。

「AIが感情を持つようになったら怖いな」

と思っていたら、“アイ・ロボット”というアメリカ映画が上映された。無感情だと思って雇ったロボットが、いつのまにか感情をもち、主人を憎み、しまいには殺そうと追いかけまわすストーリーで、私は、

（必ずありうる）と感じることをおぼえている。だからやたらにロケットをとばして、均衡の保持で成立している宇宙をあまり荒してほしくない。

先回、トム・クルーズの“新トップ・ガン”をみた。ラスト・シーンでトムちゃんはクラシックなプロペラ・プレーンを、天空でツルのように舞わせた。私は嬉しかった。

「トムちゃん、おぬしはタダ者ではないな」

とスクリーンに呼びかけ、持っていた“デパチカ（デパートの地下)”で買った“スキヤキ弁当”を、きれいに平らげてしまった。

（それが九十五歳のジジイのやることかよ！）と、自分でも呆れるが、からだはどこも悪くないのだからやむをえない。

この間誰かに「いまの世の中をどう感じるか？」ときかれたから「“ブラボー”でなく“ベラボー”な社会だ」とニクマレ口を叩いた。

本気でそう思っている。どんな世の中になろうとリンゴの木を植えつづける。それには未来ばかり空想しないで、過去を鉱脈として掘り返すことも必要だ。

昭和二十年代に黒沢明監督の黄金時代があり、多くの傑作映画が生れた。“生きる”はその一本で私にとってはいまだに“生きるためのバイブル”になっている。

戦後の民主々義社会で、市役職員も“おカミ(上)”から、“パブリック・サーバント”“住民への奉仕者”に変った。本当にそうなったか、の検証映画だが、ストーリーではそうなっていない。前以上の官僚主義の横行だ。

しかしこの映画には救いがある。小田切みきという天使がいた。バイトでお茶汲みだ。彼女は“お茶汲みの哲学”を持っている。

「わたしのいれたお茶をのんで、この課の職員が住民をよろこばせてくれたら、こんなうれしいことはない」。

ところが職員はお茶はのんでも、住民をなげかせるばかりなので、怒って辞めてしまう。幼児のオモチャをつくる町工場に転職する。ある日、前にいた市役所の上司に会う。小田切みきさんはポケットからウサギの人形を出してこういう。

「このウサギはあたしがつくったの。ウサギ一羽つくるたびにあたしはこう思うの。きょうもどこかの赤ちゃんとおともだちになっちゃった」

ガツーン！　と頭を叩かれた思いがした。自分に言葉を叩きつけた。

「おまえはバカだ！　なにが生きる道標だ？　バイトのみきちゃんはキチンと働らく意義を心得てるじゃないか。遠くの芝生ばかりみないで足もとをみろ」

以来、多少はマトモな公務員になったのでしょう。七十歳の時に勲三の勲賞をもらいました。

今、住んでいる区（目黒区）で名誉区民になっている。二人いてもう一人は王貞治さんだ。王さんは国家的仕事で忙しいので、区の行事には私が出て何か話す。

ここ数年は「成人式」でも「老人の日」でもゲオルギュのメッセージを復誦している。

考えてみればあのころ（昭和二十年代）には、日本中“リンゴの唄”が流行っていた。作詞家はゲオルギュのメッセージに気づいていたのだろうか。

過去にも磨けば宝石になる原石が沢山埋（う）もれている。